二〇一四年度　ラ・サール中学校入学試験問題　国語（時間　六十分）　その一

《一》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。）

世の中の人々が悩むものは、そのほとんどが人間関係だという。自分と他者との間に起こる問題の総称である。自分は周囲からどう見られているか、あるいは、何故自分は誤解されるのか、とA オオゼイが悩む。とにかく、「嫌な思いを少しでもしないで生きていきたい」という願望を、誰もが持っている。これは、おそらく社会に生きるほとんどの人に共通する心理だろう。

お金なんかいらない、ただ自由気ままに生きていきたい、と言う人もいるが、お金を儲けることに拘る人は、自由気ままに振る舞うためには金が必要だと考えているか、あるいは、その人の自由気ままな行為自体に金がかかる、ということであって、結局のところ、お金どうこうではなく、「自由に生きたい」ということには変わりはない。①抽象的に見て両者は同じだといえる。また、自由気ままというのは、つまり、嫌な思いをしない状態のことであるから、「楽しい思いだけをして過ごしたい」というほぼ一致した願望になるだろう。

しかし、いろいろな現実を経験するうちに、この「楽しい思い」というのは、ある程度の苦労のさきにあるものだということがわかってくる。ここが人間のB フクザツなところである。たとえば、負けるよりも勝つ方が楽しく望ましいことだが、では、苦労もなく簡単に勝つことと、工夫や努力の末に勝つことのどちらが良い気持ちになるかといえば、だいたいの人が後者だと感じるはずだ。

こういった経験を重ねると、法則として導けるほどになる。すなわち抽象すると、「楽しさというのは、苦労を重ねて勝ち取るものだ」というような感じになるだろうか。そのうち、勝ち取れる未来を見越して、その苦労の最中であっても楽しめるようになる。これなどは、明らかに想像力が見せる幻想といえるもので、②人間というのは、幻想によって元気を出している、といっても良いかもしれない。

人間関係というのは、多くの場合、他者との協力関係と言い換えることができる。お互いに得るものがあって、交換したり、分かち合ったりしている。仕事であっても、また趣味や近所づき合い、友人、恋人、あるいは家族であっても、抽象するとだいたい同じである。逆にいえば、協力関係ではないものは、既に人間関係ではない。いがみ合っているだけのような場合は、その関係から離れればC スむことである。離れられない理由がどちらかにあるから、関係というものができる。

人間関係においても、「楽しさ」には、ある程度の苦労が必要となる。③我慢をして初めて得られる、という関係だ。得られるものがわかっているから我慢ができることもあれば、また、我慢をしていたら、思いのほか素晴らしいものが得られることもある。さらには、そういったD ソントクを考えず、我慢をするだけで（尽くすだけで）満足できるというE シンキョウに至るような場合だって少なくない。

さて、「我慢をする」と簡単に言っても、そこにはやはり④最低限の「理解」が必要になる。「ああ、この人はきっとこんなふうに考えて、こんな態度を取っているのだな、まあ、このくらいのことはしかたがないか」というように、自分で納得するから、人を許すことができるようになる。「どうしてこんな馬鹿なことをするんだ？」と怒ってしまう人は多いが、少なくとも「どうしてか」が理解できないから腹が立つのだ。それが理解できれば、「そんな理由があれば無理もないか」と考えられるし、「それならばこうしてはどうか」という手が打てることも、あるいは、「少し待てば、好転するかもしれない」としばらく時間を置くような対処もできる。冷静さに必要なのは、この「理解」なのである。

人を理解するというのは、その人との対話によっても可能だが、会話があってもわからないときもあるし、また、会話がなくても、想像によって理解することもできる。

多くの人は自分がどんな感情を抱いているか、ということを明確に捉え（自覚し）ていないので、対話をしてその本人の口から言葉を引き出しても、その人の気持ちの本当のところはなかなかわからない。本人もわからないのだから、適切に表現ができる道理がない。

それよりも、その人の行動、過去の履歴などに基づいて、仮説を立て、「きっとこう考えているのだろう」と想像することで、理解ができる場合の方が多い。「そんなの勝手な理解だ」と言われるかもしれないが、そのとおり勝手な思い込みである。もしかしたら、まったくの誤解かもしれない。でも、「まあ、良い方に考えて、ここは引き下がろう」といった※ジェントルな選択だってできる。⑤たとえ誤解だったとしても、それで自分が納得できれば良い、と僕は考えることにしている。

（森博嗣『人間はいろいろな問題についてどう考えていけば良いのか』より）

※ ジェントル ―― 紳士的。上品で礼儀正しい。

二〇一四年度　ラ・サール中学校入学試験問題　国語（時間　六十分）　その二

問一　傍線部①「抽象的に見て両者は同じだといえる」とはどういうことか。次の中から最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

イ　お金こそが大事と考える人も、自由こそが大事と考える人も、誤解され嫌われないことが何よりも大事だと考えているという点で共通しているということ。

ロ　自由に生きるためにお金が必要と考える人も、自由に生きるからこそお金が必要と考える人も、何よりもお金が大事だという点で共通しているということ。

ハ　自由に生きていきたい人も、楽しい思いだけをして過ごしたい人も、人間関係を良くして生きていきたいと思っているという点で共通しているということ。

ニ　人間関係をもっとよくしたいと悩む人も、もっと自由に生きたいと思う人も、楽しい思いだけをすることが一番大事だという点で共通しているということ。

ホ　生きていくのにお金は不要だと考える人も、お金を儲けることが一番大事と考える人も、自由に生きたいと考えているという点で共通しているということ。

問二　傍線部②「人間というのは、幻想によって元気を出している」とあるが、「人間」はどのようにすることによって「元気を出している」と筆者は考えているのか。七十五字以内で説明しなさい。

問三　傍線部③「我慢をして」とあるが、筆者のいう「我慢を」することの具体例として、**適切でないもの**を次の中から一つ選び、符号を書きなさい。

イ　先生が次々に宿題を課してきても、自分のことを鍛えてくれているのだと考えて、頑張ってそれらをやりこなすこと。

ロ　父さんが厳しく叱ってきても、それが終われば母さんがなぐさめてくれるはずと考えて、説教が終わるのを待つこと。

ハ　隣の家がうるさくても、うちまで音が届いているとわかっていないのだと考えて、すぐに怒鳴りこんだりしないこと。

ニ　友達が急に意地悪をしてきても、自分が何か嫌なことをしてしまったのかと考えて、しばらくじっと様子をみること。

ホ　妹がひどい悪口を言うようになっても、大人ぶりたい年頃なのだろうなと考えて、喧嘩せずに聞き流してあげること。

問四　傍線部④「最低限の『理解』」とは、何をすることか。その説明になるように、次の空欄にあてはまる表現を考えて十字以内で答えなさい。

を考えて納得すること。

問五　傍線部⑤「たとえ誤解だったとしても、それで自分が納得できれば良い」とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。本文全体の内容をふまえて、百四十字以内で説明しなさい。

問六　傍線部A～Eを漢字に改めなさい。

（五十点）

二〇一四年度　ラ・サール中学校入学試験問題　国語（時間　六十分）　その三

《二》次の文章は森浩美の小説「イキヌクキセキ」の一節である。東京に住む「私」のもとに、東日本大震災で行方不明になっていた、石巻在住の妹（佐藤多香子）夫婦の遺体が発見されたという知らせが入る。しかし「私」はこのとき事故で入院しており、石巻を訪れたのはそれから三ヶ月後であった。生き残った多香子の娘（「葵」）は、父方の祖父（「佐藤の父」）と一緒に石巻で暮らしている。読んで後の問いに答えなさい。（字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。）

「葵、すぐに来られなくて悪かったな」

中学三年生になった葵は、どことなく多香子の面影を感じさせた。

「別にいいよ」

「いや、本当に申し訳なかった。ただ、おじちゃん、こんなだったから」と、私は自分の足に視線を落とした。動けなかったのは事実なのに、【　①　】がある。

部屋の中を見回すと、一応、ひと通りの物は揃っているようだったが……。

「あの、どうでしょうか、葵とふたり東京に来て、私たちのうちで暮らしてみませんか？」

佐藤の父に、そう切り出した。

すると「やだっ、あたしは行かない。絶対に行かないっ」と、葵が口を挟んだ。

「こら、葵。そんな口の利き方があるか」

そう佐藤の父に咎められたものの「じいちゃんは行きたいわけ。だったら、ひとりで行けばいいっ」と言い放ち、部屋を飛び出した。

「こら、葵、どこ行く？」佐藤の父が追い掛けようとして腰を上げると「私が見てきます」と妻が制した。

「ああやって、ワシに悪態ついて気が紛れるんなら、それでいいと思っとります。いっぺんに親を亡くしちまったんだから……。そういうことですので、お気持ちはありがたいのですが」

そう言って佐藤の父は深々と頭を下げた。

このままふたりを残して東京に戻るなど、最善の策だとはとても思えなかったが、一方でそれ以上無理強いする気にはなれなかった。

それから季節は一巡し、葵は県立高校へ無事進学した。入学祝いにと、最新の※ｉＰｏｄを贈った。

だが、昨年の八月半ば、悲しい知らせが届いた。佐藤の父が倒れ、そのまま帰らぬ人となったのだ。元々、心臓に持病があったこともあるが、仮設住宅での生活が負担になってしまったのだろう。

すぐに葵のもとに駆けつけた。

お棺にすがりながら「じいちゃん、あたしを置いて行かないでよ」と、何度も叫ぶ葵が痛々しく直視できなかった。②悪態をつけたのは、頼りにしていた裏返しだったに違いない。甘えられる唯一の人を、葵は亡くしてしまったのだ。

「葵、東京のおじちゃんちで暮らすぞ」

「いい。あたしはここに残る。ひとりで大丈夫だから」

「そんなわけにいかないだろう」

故郷を離れることを嫌がった葵を、半ば強引に説き伏せ我が家に引き取ったのだ。とはいえ、葵にしてもどうにもならないことだとあきらめがあったはずだ。ただ、石巻を離れることは、家族を見捨てる、いや裏切るような思いがしたのだろう。

「父ちゃんも母ちゃんも、それにおじいちゃんも、誰もお前を責めやしない」

高台にある佐藤家の墓地に参り、手を合わせる葵の肩に手を置いた。③微かに伝わる震えが、※あの晩見た夢を思い出させた。私は心の中で〝ああ、分かってるよ。何も心配するな〟と妹に語り掛けた。

都の対策である、被災した子どもの受け入れ制度を使い、葵をうちの近くにある都立高校へ編入させた。

亡くなった両親が使っていた六畳間を、葵の勉強部屋として用意した。物置代わりになっていた部屋を片付け、水色のカーペットを

敷き、同系色のカーテンに付け替え、机とベッドを置いた。

「あの年頃の女の子は、どういったものが好みなんだ？」

「気に入ってくれるといいんだけど」

最初はやはり、A腫れ物に触るような接し方になってしまった。伯父と姪という血の繋がりはあっても、日常的に顔を合わせていたわけではない。姪とはいえ、知らないことばかりなのだ。実のところ、どう接してよいものか分からない。親ではない、単なる親代わりなのだ。それが微妙に切なく、そして難しい。

「どうだ、学校は？」「友達はできたか？」「みんなやさしくしてくれるか？」

朝晩、食卓で顔を合わせるたびに、そう尋ねたものだが、葵は決まって「うん、まあ」とか「別に」と短く答えるだけだ。

「オレたちはさ、今や家族なんだ、困ったことがあればなんでも言えよ」

「違う。家族なんかじゃない」

葵は小さく低い声で否定すると、食事を途中でやめて自室にこもってしまったこともある。

「あんまり、質問攻めにしない方がいいわよ。それから、無理に家族を意識しなくても」

そう妻から窘められた。

「オレはただ……」

「分かってるわよ……。でも、葵ちゃんが実の娘だったとしても難しい年齢だし。ね」

「だけどな、オレは多香子のやつから……」と言いかけて、その後に続く言葉を呑み込んだ。

頼むって言われたんだ、多香子に……。こんな調子じゃ、あいつも心配だろうな。そう思うと敗北感のようなものに包まれた。

葵が東京で生活し始めて一ヶ月が経った頃、クラス担任の松宮先生が学校での様子を内緒で報告しに来てくれたことがあった。年の頃は三十代半ばといったところだろうか。

「今のところ、特に問題になるようなことはないのですが、まあ、抱えている事情が事情ですから」

「葵はクラスの子たちとうまくやってるんでしょうか」

「まだ一ヶ月ですからね、完全には馴染めてはいないと思います。それでもクラスの生徒は何かと気遣ってくれているようです」

「ああ、そうですかあ。それはありがたいです」

「ただ、それが意外と④裏目に出る場合もあるようで……」

「え、と、いうと？」

「実は大学時代の同級生で、神戸で被災した友人がいまして。彼の母親は倒壊した家の下敷きになって亡くなったんですが、しばらくは無力感に支配されたようです。隣の部屋にいたのに助けてやれなかったとかなり落ち込んで……。これは無理もない話です。周りの人や支援の方々が親切にしてくれると、同情の押しつけをされてる感じがして嫌気がしたそうです。ちょっと、なんというのでしょうか、もう放っておいてほしいという気分だったというんです。勿論、ありがたさは重々分かっていたんですよ。好きだったバスケ部の練習もサボり始め、素行の悪い連中とつるんで、煙草を吸ったり、残った家族にも悪態をついてばかりだったそうです。オレはオレでやっていけるんだと主張したかったと振り返ってました」

葵もきっと同じ心持ちなのだろう。

「そんなとき、見兼ねたバスケ部の顧問から『そんなこと続けとったら、亡くなったお母さんが悲しむやろ』と言われて。いつもなら反発するところだったんでしょうが、その先生、やはり震災でお子さんを亡くしたそうで、何も言い返せなかったらしいです。先生も悲しいはずなのに自分のことを気に掛けてくれていると……」

「まあ、そういう人に言われたら……。私も妹を失ったわけですが、ある程度大人ですから受け止め方も葵とは違いますしね。しかも、両親をいっぺんに亡くしたわけですから……。まったく、どう接していいものやら分かりません。それに、身内というのは微妙なところで、やさしくしてもだめだし、強く出てもだめだし。まあ、ちょっと処置なしです」

私は口を結んで首を振った。

「今、葵さんに必要なのは、本当に心を許せる友達か、夢中になれる何かなんだと思います。神戸の彼の場合、部活に戻り仲間と大会

二〇一四年度　ラ・サール中学校入学試験問題　国語（時間　六十分）　その五

で優勝することを目標に頑張ったそうです。そして成し遂げたとき、みんなと繋がっていてよかったなと実感したって言ってました。葵さんにも、何か目標というか、夢中になれるようなことが見つかればいいんですが。彼が言うには夢中になることは心を埋める感覚じゃないそうです。むしろそういうものが見つかると、心に空間が生まれるそうなんですよ」

「心の空間ですか」

「余裕という意味なんでしょうが。空間ができれば、他人の言葉を受け入れることができるようになるんだと。私も注意深く接していくつもりですが、ご家庭でも⑤そういう視点から見守っていただければと……」

見守ることしかできないのだ。それがB歯痒く不甲斐なかった。

この半年、葵の心に空間が生まれた様子は感じられなかったのだが……。

※　iPod ――　携帯型デジタル音楽プレイヤー。

※　あの晩見た夢 ――　震災から二日後に、多香子が「私」の夢に出てきて「葵をお願いします」と言って消えたことを指している。

問一　傍線部A「腫れ物に触るような接し方」・B「歯痒く」の文中における意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、符号を書きなさい。

A「腫れ物に触るような接し方」

イ　なんとか相手を喜ばせたいと工夫して接するやり方
ロ　少しずつ慣れてほしいと祈る気持ちで接するやり方
ハ　困難を克服させるためにわざと冷たく接するやり方
ニ　非常につらく心苦しい思いをしながら接するやり方
ホ　おそるおそる相手に気をつかいながら接するやり方

B「歯痒く」

イ　じれったく　ロ　腹立たしく　ハ　あどけなく　ニ　こそばゆく　ホ　なさけなく

問二　【　①　】に入る言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選び、符号を書きなさい。

イ　不信感　ロ　違和感　ハ　罪悪感　ニ　一体感　ホ　使命感

問三　傍線部②「悪態をつけたのは、頼りにしていた裏返しだった」とはどういうことか。人物を明らかにして説明しなさい。

問四　傍線部③「微かに伝わる震え」とあるが、「私」の目から見た葵のこのときの気持ちはどのようなものであるか。次の中から最も適切なものを一つ選び、符号を書きなさい。

イ　故郷を離れることは亡くなった家族を裏切るように思えて激しく落ち込みつつ、墓に手を合わせて家族の冥福を祈るうちに、故郷を離れることを許されたような気がしてきて感極まり、喜びの涙にくれている。

ロ　故郷を離れることは亡くなった家族を裏切るように思えて悲しくてたまらず、引っ越しを受け入れはしてもまだ完全には気持ちの整理がついていないのに、勝手に事を進めた「私」への怒りで打ち震えている。

ハ　故郷を離れることは亡くなった家族を裏切るように思えて心苦しく、誰に何を言われても自分が責められているとしか思えないので、これからさらにどんなことを言われるかと思って何も言えなくなっている。

ニ　故郷を離れることは亡くなった家族を裏切るように思えてつらく、自分ではどうにもならない現実に圧倒される思いのなかで、家族を失い一人ぼっちになってしまった心細さを墓参りで改めて実感している。

ホ　故郷を離れることが亡くなった家族を裏切るように思えて仕方ないため、「私」と妻の優しい態度を無視することで、東京へは絶対に引っ越しするまいという決意をさらに固くして心を完全に閉ざしている。

問五　傍線部④「裏目に出る」とは、葵の場合どういうことか。次の中から最も適切なものを一つ選び、符号を書きなさい。

イ　クラスの子たちが被災した葵を何かと気遣ってくれることを、葵はありがたく思ってはいるが、皆に完全に馴染めていないことを敏感に感じとった時には、周囲に腹を立て悪態をつく場合もあるということ。

ロ　クラスの子たちが被災した葵を何かと気遣ってくれることを、葵はありがたく思ってはいるが、時には同情をおしつけられたように思うことがあるため、嫌気がさして態度が悪くなる場合もあるということ。

ハ　クラスの子たちが被災した葵を何かと気遣ってくれることを、葵はありがたく思ってはいるが、時には母を助けてやれなかったと落ち込んでしまい、誰とも話したくないとふさぎ込む場合もあるということ。

ニ　クラスの子たちが被災した葵を何かと気遣ってくれることを、葵はうっとうしいと思ってしまい、皆に優しくされればされるほどかたくなになって、好きな部活を休んでしまうような場合もあるということ。

ホ　クラスの子たちが被災した葵を何かと気遣ってくれることを、葵はうっとうしいと思ってしまい、自分のことはもう放っておいてほしいと言い、無理な自己主張をして先生を困らせる場合もあるということ。

問六　傍線部⑤「そういう視点から見守っていただければ」とあるが、「そういう視点から見守る」とはどうすることか、八十字以内で説明しなさい。

（三十五点）

《三》次のⅠ・Ⅱの問いに答えなさい。

Ⅰ　次の①～⑦のカタカナの語を漢字に改めなさい。

「流行語大賞」とは、その年の世相をよく反映した言葉を選ぶもので、毎年多くの人たちの関心を集めている。昨年は流行語①ホウサクの年といわれるほど②コウホが多く、なにが大賞に選ばれるか③ヨダンを許さない状況だった。そのためか、最終的な発表では、④イレイのことだが史上最多の四つが選ばれた。一つ目は東北地方の方言である「じぇじぇじぇ」。二つ目は東京五輪招致活動のスピーチで使われた「お・も・て・な・し」。三つ目は銀行員が会社⑤ソシキの中で⑥フンセンする様子を取り上げたテレビドラマのせりふの一部である「倍返し」。そして最後は、国語の講師が⑦ジュギョウの中で用いた「今でしょ！」である。

Ⅱ　次の⑧～⑮の□に最も適切な漢字を一字入れて、文を完成させなさい。

⑧　父は、子供の頃、□貧洗うがごとき苦しい生活をしていたらしい。

⑨　あえて倒産しそうな会社の社長を引き受けるなんて、まるで□中の栗を拾うようなものだ。

⑩　手□にかけて育ててきた娘の晴れ姿を見て、両親は泣いて喜んだ。

⑪　まずはやってみるがいい。□するより生むが易しというではないか。

⑫　彼は、テストの結果がよほどうれしかったのか、自分の解答を自□自□し続けた。

⑬　その弟子は、師の教えを金科□□として、死ぬまで大切に守り続けた。

⑭　引退してからの祖父は、ゆったりと晴□□読を楽しむ生活をしている。

⑮　妹は兄の帰郷を二□千□の思いで待ち続けた。

（十五点）

二〇一四年度　ラ・サール中学校入学試験問題

国語（時間　六十分）　解答用紙

《一》

問一

問二

75字

問三

問四

を考えて納得すること。

問五

140字

問六

A

B

C

む

D

E

一小計

受験番号

得点

《二》

問一

A

B

問二

問三

二小計

問四

問五

問六

80字

《三》

I

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

II

⑧

⑨

⑩

⑪

貧洗うがごとき

中の栗を拾う

手

にかけて

ずるより生むが易し

⑫

⑬

⑭

⑮

自

自

金

科

晴

読

一

千

三小計